

平成9年度

教室の窓から世界が見える

— 高等学校における国際理解教育の教材開発とその活用 —

川崎市総合教育センター 高校教育研究会議

教室の窓から世界が見える

— 高等学校における国際理解教育の教材開発とその活用 —

高校教育研究会議

新保 利幸¹ 永塚 勲² 水野 貴司³ 黒川 保人⁴
篠原 満⁵ (平成8年度) 坪田 四郎⁶ 中山 陽洋⁷ (平成8年度)

要 約

国際理解教育の必要性が叫ばれ、様々な方法での実践が試みられている。たとえば、国際交流や帰国子女教育や教科指導などを通しての国際理解教育である。これらの実践は着実に成果を残し、今後においても国際理解教育の大きな実践分野としてより積極的に継承されていくことであろう。

本研究では、これらの実践の大切さを認めたくえで、これまでありがちだった知識理解を中心とする国際理解教育ではなく、国際化時代の中で必要な資質・能力・態度を伸ばすための教材の開発とその活用法の研究に取り組み、さらに、その研究成果がより多くの場面で、より多くの生徒に広がるようなあり方をめざした。研究の中心は以下のような事柄である。

○高等学校において国際理解教育に取り組むための『国際理解教育ハンドブック』(A4判, 200ページ)を作成する。

○ハンドブックの構成の中心は、生徒用の「ワークシート」とその教師用手引き、ならびに国際理解教育に関連する「資料集」であり、以下の事柄に留意しながら開発、作成する。

「ワークシート」

- ・開発の視点は、生徒が主体的に活動し、学び、考え、話し合う中で自らの国際性を伸ばすことができるワークシートの作成を目指すことである。また、ワークシートの活用法や発展的な活動についても研究する。
- ・利用対象は国際科などの特定の生徒だけではなく、すべての高校生を対象とする。活用場面としては、ホームルームや教科指導などを念頭におく。

「資料集」

- ・ワークシートや発展的な活動に取り組む上で役立つ資料の掲載を心がけながら、資料の収集、検討、編集を行う。
- ・川崎市という地域性を重視することも心がけながら、資料の収集、検討、編集を行う。

以上の事柄を念頭に置いてハンドブックの開発に取り組むが、作成後は、広く活用されることにより国際理解教育がさらに推進されることを期待し、川崎市立のすべての高等学校ならびに中学校へ配布する予定である。

キーワード：高校教育、国際理解教育、教材開発、学級指導、ホームルーム活動、教科指導

目 次

I 主題設定の理由	114	4. ワークシートの実践例	123
1. 国際理解教育をとりまく状況	114	5. 資料集の作成	127
2. 研究のねらい	115	III 研究の成果と今後の課題	127
3. 研究の方法	115	1. 研究の成果	127
II 研究の内容	116	2. 今後の課題	128
1. 国際理解教育の目標	116	おわりに	128
2. 『国際理解教育ハンドブック』の開発	116	参考文献・指導助言者	128
3. ワークシートを中心としたユニットの作成	117		

¹川崎市立高津高等学校教諭(主任研修員)

²川崎市立商業高等学校教諭(研修員)

³川崎市立川崎総合科学高等学校教諭(研修員)

⁴川崎市立橘高等学校教諭(研修員)

⁵川崎市立川崎総合科学高等学校教諭(前主任研修員)

⁶川崎市総合教育センター研修指導主事

⁷川崎市立川崎総合科学高等学校教頭(前川崎市総合教育センター研修指導主事)

I 主題設定の理由

1. 国際理解教育をとりまく状況—なぜ国際理解教育なのか—

国際理解教育の必要性については、各所で述べられているが、川崎市の地域性や市立の高等学校の状況にも触れながら以下の5つに整理してみた。

(1) 地球の狭小化と人類の共通諸課題

地球に住む私達一人ひとりの、国際理解への積極的な態度が世界の狭小化によって求められている。遠く離れ、しかも、異なった価値観や文化をもった人々が、瞬時にして接触を持つことが可能になり、また、ある国・地域の出来事が間接的にあるいは直接的に他の国・地域の人達に大きな影響をおよぼすようになった。このような状況においては、お互いが偏見を持たずに話し合い、理解し合うことが大切である。ここに国際理解教育の必要性が認められる。

また、地球的な規模における人類共通の諸課題にも国際理解教育の必要性を認めることができる。その諸課題とは、例えば、環境問題、南北問題、地域戦争、地球の温暖化、人口問題、エネルギー問題などである。このような人類の共通諸課題の解決は各国の政治・経済の要人の集まりだけでは成しえないであろう。最終的には、地球市民一人ひとりの心の中で、問題解決への自覚や他の国・地域を理解する姿勢などが育たなければならない。つまり、共に生きることの大切さを自覚することや人類の共通諸課題にたち向かう態度が世界の一人ひとりに求められるのであり、このことは、まさに国際理解教育が目指すところである。

(2) 臨教審、中教審と国際理解教育

日本で「国際化」が叫ばれる中、1987年、臨時教育審議会の最終答申が出され、そこでは、21世紀の教育目標として、以下の3つがあげられた。

- ① 広い心、健やかな体、豊かな想像力を養う
- ② 自由・規律の精神と公共の精神を育てる
- ③ 世界の中の日本人を育成する

この③において、現在の教育課題としての国際理解教育の必要性が明示されていることを確認しておかねばならない。

そして、このような流れを受け、平成8年7月に出された中央教育審議会第一次答申において、国際理解教育を進めていくことの必要性が再度強調されていることを確認しておくことも大切であろう。その答申の第3部は今後の社会の変化に対応する教育の在り方について書かれたものであるが、その社会の変化に対応する内容として、情報化、科学技術の進歩、環境問題、そして国際化があげられている。冷戦が終焉した後、国際化はさらに

進展し、今後ますます加速していくととらえたうえで、これからの時代に対応するためには、国際性の資質や能力を伸ばすこと、自己確立を図ること、コミュニケーション能力を育成することなどがこれからの教育に期待されるとしているのである。

(3) 国際化に向けての生徒たちの意識

国際理解教育のめざすところは、ただ単に英会話ができ、外国人と違和感なくつきあうことのできる人間を育成することではなく、柔軟な思考力を身につけ、グローバルな視野で物事を考え、他の一人ひとりを大切にすることのできる人間の育成をめざすことにある。しかし、本研究の準備研究の段階（平成7年度）で行った生徒意識調査によると、多くの生徒は海外旅行や外国文化などには高い関心を示しながらも、それに比較して、日頃の生活において世界とのつながりを自覚する度合いや、世界の異文化や様々な価値観を積極的に理解しようとする意欲は低い。したがって、このような生徒の意識調査からも、生徒の国際性を伸ばす必要があると考えられる。

(4) 川崎市と国際理解教育

川崎市は国際都市といってよい。例えば、川崎市の海外の姉妹都市、友好都市はそれぞれ4都市ずつあり、また、貿易額では全国の貿易港のうち第10位（1993年）を占める川崎港はベトナムのダナン港と友好港の関係にある。そして、川崎市立の小学校・中学校・高等学校の海外の姉妹校提携は20校近くにおよぶ。さらに、市内の在日外国人の数も多く、1996年3月31日現在の外国人登録者数は19,490人であり、その出身国の数は98にも上る¹⁾。このような状況の中、全国で論議が高まっている地方公務員採用試験での国籍条項撤廃に関して、川崎市は先駆的な役割を果たし、また、外国人市民代表者会議の開催やその運用などにおいても全国的な規模での注目を集めている。このような地域に生きる高校生のグローバルな視野を育て、広げていくことは意義あることといっていよう。

(5) 国際化と川崎市立の高等学校

このような流れの中、川崎市立の高等学校にも国際化に向けての変化が見え始めている。最も顕著な例は、商業高校の「国際ビジネス科」設置と橘高校の「国際科」の新設である。この両校において国際理解教育が十分になされていくことは不可欠であるが、他の高校においても、取り組み方の違いはあっても国際理解教育が適切な形で行われていかなければならないことは時代の要請である。

川崎市内の小学校・中学校での国際理解教育への取り組みを歴史的に眺めたとき、そこにはめざましいものが

注1) 川崎市発行の外国人市民代表者会議に関する資料のうち「川崎市に定住する外国人市民の状況」を参考

ある。それは、ユネスコの共同実験学校としての取り組み、国際交流活動、教科を通しての国際理解教育、あるいは帰国子女教育と関連しての国際理解教育などである。高校教育においては、近年になって、いくつかの学校では海外の学校へ留学生を送ったり、また商業高校では留学生の受け入れを行ったりしているが、該当生徒に限られていたり、単発的な形での国際理解教育の段階であったり、まだ十分な取り組みとまでは言えないであろう。今や、川崎市立の高校での国際理解教育のさらなる充実が待たれるところである。

一方、このような状況においての市立の高校教員の国際理解教育に対する意識についてであるが、本研究会議で行った「国際理解教育における教員の意識調査」においても、国際理解教育に関する研究推進の必要性が認められる。なぜなら、回答者の81.5%の教員が国際理解教育の必要性を認めながらも実際の取り組みは、「いつも行っている」は5.2%、「ときどき行っている」は41.9%となっており、また、国際理解教育を進める上で障害となる事柄としては、割合の高いものから順に「教員間の共通理解を得ることが難しい」「国際理解教育の内容がわからない」「国際理解教育のカリキュラムがない」「国際理解教育の教材がない」などがそれぞれ35%前後の割合で続き、このような実態に対応するためにも、国際理解教育に関する研究は推進されるべきであると考えられるのである。

2. 研究のねらい

国際理解教育に取り組む方法は様々であるが、本研究では、『国際理解教育ハンドブック』の作成に取り組んだ。このハンドブックは、生徒向けの様々なワークシートとそれに対応する教師用手引きを主な構成要素とし、それに国際理解教育に関連した施設・機関、参考図書、視聴覚教材などを紹介した資料集をそえたものである。このハンドブック作成におけるねらいは次のような事柄であった。

(1) 生徒の国際性を伸ばすワークシートの作成

これまでの国際理解教育は、国際性を伸ばすために何が必要であるかを教える教育であったと反省されることがあるが、このハンドブックのワークシートのねらいは、国際化に向けての生徒の資質や能力を育てることにある。別の言い方をすれば、知識中心のワークシートではなく、生徒が主体的に活動することによって、国際理解について目を開き、国際化時代に必要な資質・能力を伸ばし、自己確立に近づいていくといったことをねらいとしたワークシートを作成するのである。また、このワークシートの教師用の手引きには、「発展活動」を提示し、国際性を伸ばすための様々な活動形態・内容も提示した。

(2) 身近で、気軽に活用できる教材の作成・開発

教師・生徒の両者にとって、身近で、気軽に取り組める教材としてのワークシートの開発を試みた。国際理解教育には様々な方法があるが、そのようなワークシートが、より頻繁に、ごく自然な状況の中で活用されていくことによっても国際理解教育がさらに推進されると考える。その推進とは、各学校での、新しいワークシートの開発も含まれると考える。

(3) 国際理解教育を進めるうえでの資料の提供

国際理解教育の必要性を感じていても、資料・教材等を収集することは容易ではない。そのため、ハンドブックの作成においては、国際理解教育を進めるうえで参考になりそうな視聴覚教材、施設・機関・団体、図書、リソースブックなどに関する情報を収集し、編集することも本研究の一環であると考えた。また、国際理解教育をどうとらえるかや本研究会議で行った生徒・教員への実態調査の結果なども掲載した。

(4) 国際理解教育の推進

ハンドブックは、川崎市立のすべての高校ならびに中学校に配布する予定である。各学校でこれを活用することにより国際理解教育の推進を図りたいと考える。また、このようなハンドブックの作成・配布は、川崎市立の中学校・高校の教師が共通基盤で国際理解教育について論じあうに有益な資料となるであろう。

本研究は以上の視点のもと、主題として「教室の窓から世界が見える—高等学校における国際理解教育の教材開発とその活用—」を掲げ、その完成・配布をめざし、研究を推進した。

3. 研究の方法

(1) 国際理解教育についての理解

まず、国際理解とは何か、そして国際理解教育の目標は何か、ということを経験の土台として検討する必要がある。次いで、国際理解教育に取り組む様々な領域や国際化時代に求められる資質・技能を整理し、本研究の位置付けを明確にすることが要求されると考えた。

(2) 『国際理解教育ハンドブック』の開発

ハンドブックの主な構成を以下の2つと考えた。

① ワークシートを中心としたユニット集

ワークシートを中心としたユニットをトピックごとに作成する。ユニットの構成は基本的に、1つのトピックにおいて、i. ワークシート ii. 教師用手引き iii. 発展活動 iv. 関連資料、の4つであると考えた。

ワークシートの作成において留意すべきは、つとめて生徒の主体的な活動が期待できるワークシートを作成することである。なぜなら、前述のように、より主体的な、あるいは体験的な活動をすることによって国際理解に必要な資質を伸ばすことができると考えるからである。

また、ワークシートの作成と並行して、そのワークシートを使つての国際理解教育の実践を行う必要もあろう。理由の一つは、国際理解教育を実践することそのものの大切さであり、もう一つの理由は、ワークシートの使用による生徒の変化を確認しながら、より良いワークシートのあり方を研究していくためである。

②資料集

ハンドブックに掲載されるにふさわしい資料は何かを検討し、ついで資料収集、選択、編集と作業が続き、最終的な見直しを行いながら資料集を作成した。

II 研究の内容

1. 国際理解教育の目標

(1)国際理解教育の目標

国際理解教育の目標や国際性のある生徒の姿をどのようにとらえるかについては、小学校、中学校、高等学校のつながりを考慮する中、これまでの川崎市総合教育センター国際理解教育研究会議の研究成果を取り入れた。その研究会議が作成した国際理解教育目標の特徴は、以下のようになっている。

①国際理解教育を広くとらえ、「A：豊かな社会性を持つ」「B：違いを認めて理解し合える」「C：主体的に自分を表現できる」の3つの柱を基本的な構成単位とする。

②「A：豊かな社会性を持つ」が、土台部分に位置付けられ、その上に、「B：違いを認めて理解し合える」「C：主体的に自分を表現できる」が位置付けられる。これら3つの構成単位は、互いに作用しあい、また、部分的に重なり合って高まってくると考えられる。

③上記A、B、Cの各柱には、中核目標が3つずつ位置付けられており、それが、国際理解に必要な具体的な資質・能力・態度といえる。(p.119の「ワークシートの主なねらいと国際理解教育目標との関連」を参照)

2. 『国際理解教育ハンドブック』の開発

(1)『国際理解教育ハンドブック』の構成

ハンドブックの構成は概ね以下ようになった。

I. 国際理解教育について

1. 時代の流れの中で
2. 国際理解教育の目標と実践

II. ハンドブックの使い方

1. 国際理解教育ハンドブックの作成のねらい
2. ワークシートを中心としたユニットの活用

III. ワークシートを中心としたユニット集

1. 「豊かな社会性」を主なねらいとしたワークシート (トピック1～トピック9)

2. 「違いを認めて理解しあうこと」を主なねらいとしたワークシート(トピック10～トピック19)
3. 「主体的な自己表現」を主なねらいとしたワークシート (トピック20～トピック25)

IV. 国際理解教育に関連する資料集

1. 川崎市に関連するもの
2. 図書、ビデオ教材、関連機関に関するもの
3. 生徒・教員の実態調査集計結果

「Ⅲ. ワークシートを中心としたユニット集」における各ワークシートの具体的なトピック名は、p.119の「表1 ワークシートの主なねらいと国際理解教育目標との関連」を参照されたい。

(2)トピックの設定

題材としてのトピックの選択・決定は本研究の大切な要素であるが、基本的には以下の3つの観点に留意しながらトピックの設定を行った。

- ①生徒が興味をもっている事柄
- ②地域性のあるもの (川崎市に関連のあるもの)
- ③国際理解教育目標の3本の柱と関連のあるもの

(3)ハンドブックの利用対象者

ハンドブックそれ自体は教師用に書かれたものであるが、ハンドブックの中心を成すワークシートは生徒向けであり、生徒が活動するためのものである。このワークシートは、国際ビジネス科や国際科などの生徒や帰国生徒あるいは外国籍の生徒などを特別に対象としたものではなく、すべての高校生を対象としている。すべての高校生がグローバルなものの見方を伸ばしていくことが必要な時代であると考えからである。

(4)活用領域

「国際理解」という科目が設定されているならば、そこでの活用がもっとも自然であるが、現在の段階では、そのようなことは話題にはなっても、実際に教育課程の中に設定されている高校は全国でも少数である。そのため、本研究では、活用領域として、ホームルームや教科指導などを念頭に置いている。ただし、前記3つのいずれで扱う場合でも、学期や学年、あるいは3年間を見通した中での位置付けが、各教師・学年・学校によって明確にされることが必要である。例えば、教科指導の中で活用する場合は、ある一つの単元において、知識の習得のほかに、ビデオの視聴、調べ学習、施設への訪問、ロール・プレイやシミュレーションによる活動、インタビュー、スピーチ、ディスカッション、論文作成・発表など様々な活動形態が考えられるが、その中の一つとして、ワークシートへの取り組みが位置付けられるのである。

そして、それらの活動を適切に、計画的に、組み込んでいくことが大切なのである。

3. ワークシートを中心としたユニットの作成

(1) ユニットの例

トピック「イメージはどこからやって来る？」のユニットの例を以下に提示する。

資料①は、生徒が取り組む「ワークシート」であり(p.117)、資料②は「教師用の手引き」、「発展活動」および「関連資料」である(p.118)。編集上、縮小して掲載されており、また、ワークシートに取り組むための資料(「アメリカ人のイメージ」)の掲載は紙面の関係上、省略した。

資料①

トピック 11

ワークシート

年 組 番 氏名 _____ 月 _____ 日 _____

イメージはどこからやって来る？

現在、日本には、海外の様々な国から来た人達がたくさん住むようになっています。また、日本の貿易や文化は、日増しに、海外の国々やそこに住む人達との関連を密にしています。そんな中、私達は、「日本人は〇〇〇〇だ」「中国人は〇〇〇〇だ」「アメリカ人は〇〇〇〇だ」という言い方をしますが、今日は、ある特定のグループの人達に対して私達が持っているイメージについて考えてみましょう。

アメリカ人

I. アメリカ人(国籍がアメリカ合衆国の人)に対してあなたがイメージすることを書いてみましょう。

II. アメリカ人に対するあなたのイメージは、グループ(クラス)の人達と比べてどんな違いがありましたか？(あるいは同じでしたか？)

あなたと同じイメージ	あなたと違うイメージ

III. ほかの人達とのイメージとあなたのイメージを比べた場合、同じものがあるのはなぜでしょうか？違うものがあるのはなぜでしょうか？

(同じイメージなのはなぜ？)

(違うイメージなのはなぜ？)

IV. 資料①「日本人から見たアメリカ人のイメージ」を見て、あなたのイメージと異なるイメージで、印象的なもの一つ書きなさい。また、その理由も書いてみましょう。

印象的なイメージ	
印象的な理由	

V. 資料①を見て、アメリカを訪れる前のイメージと、日本に帰ってからイメージが違ふことについてあなたはどのように思いますか？書いてみましょう。

VI. あなたがアメリカ人に対してもっていたイメージは、アメリカの実像を正しく表していると思いますか？グループで話し合った後に、以下のア～オの中から1つ選び○を付けなさい。

ア. すべて正しいと思う イ. すべて正しくないと思う
ウ. 正しいものと正しくないものが混ざっていると思う
エ. わからない オ. その他 ()

VII. あなたがアメリカ人に対して持っているイメージは、一面的だと思いますか。

ア. そう思う イ. そう思わない ウ. わからない
エ. その他 ()

VIII. 今日の活動で気付いたことはどんなことですか？ IX. もっと知りたいと思ったことは何ですか？

教師用手引き

1. ねらい
 - (1) ある特定のグループの人達に対するイメージが、かたよった情報や間違っただ情報などにより勝手に作り上げられていることがないかを考える。
 - (2) 目標構造図との関連
 - A-2：人権・生命の尊重
 - ◎B-2：異文化理解
 - C-1：思考力・判断力
2. 時間
 - 1 時間
3. 準備するもの
 - (1) 資料④「日本人から見たアメリカ人のイメージ」(全生徒分)
4. 活動形態
 - 事象・問題発見型
 - 話し合い・討論型
5. 生徒の活動
 - (1) I に取り組む。
 - (2) 5人くらのグループを作り、II に取り組む。
 - (3) III にグループで取り組む。グループの意見を発表する。
 - (4) 配布された資料④を見ながら、各自でVI に取り組み、グループで意見交換する。
 - (5) 各自で、V に取り組み、クラスで意見交換する。
 - (6) 各自で、VI に取り組み、クラスで意見交換する。
 - (7) 各自で、VII に取り組み、全員でクラスの傾向などを確認する。
 - (8) VIII に取り組み、発表する。
6. 留意事項・その他
 - (1) 間違っただイメージや一面的なイメージが偏見を生み、それが差別につながる可能性があることにも触れる。(間違っただイメージが対象を過大評価する場合もある)
 - (2) 固定観念、ステレオタイプという言葉にも触れておくことが望ましい。(関連資料④「ステレオタイプについて」を参照)
7. ワークシートの記入例
 - I-Ⅱ 省略
 - III
 - ・イメージが同じ理由：
 - ・日本国内で同じテレビを見て、同じ新聞、本などを見ているから
 - ・日本からアメリカを見るので、片寄った情報しか入ってこない
 - ・イメージが異なる理由：
 - ・各個人で、違う本、新聞を読んで、違うテレビの場面を見たから
 - ・個人で体験が異なる (アメリカ人と話をした人、アメリカ人に行ったことがある人など)

Ⅳ 省略

- V
 - ・アメリカ人になりたい自分のイメージに自信が持たなくなってきた
 - ・自分もアメリカに行って、本当の様子を見てみたいと思う
- ・アメリカに行った人でも、2回、3回と行くうちに、またイメージも変わると思う。だから、正しいイメージをもつのは難しい。

Ⅴ-Ⅹ 省略

Ⅴ-Ⅹ 省略

8. 教科指導での活動例

- (1) 現代社会において「人間と文化」などを扱ったり、英語でアメリカの文化背景を扱ったりする際に、活用できる。

発展活動

1. 外国人にアメリカに対するイメージを聞いてみる。
 - ヒント
 - アメリカ出身の外国人講師を教室に招いて、アメリカについて話しを聞
 - アメリカ以外の国出身とする外国人講師を教室に招き、アメリカに対するイメージについて話してもらおう。
2. 日本人のイメージについて外国の人に聞いてみる。
 - ヒント
 - 関連資料②「外国人から見た日本」を参考に話し合う。
 - A.L.T. (青年外国語講師) に日本のイメージについて話してもらおう。
 - ポール・ボネ「不思議の国ニッポン」(角川書店)などを読んで、印象的な事例を発表する。

関連資料④

ステレオタイプについて (出典：「国際教育事典」アルク、1991)

ステレオタイプ (stereotype) 被切り型と訳される。原義は、大量印刷を可能にした鉛版による印刷方法およびその鉛版であるが、1922年にリッパマン (Walter Lippmann (1889-1974)) によって使用されて以来、社会科学上の重要概念となった。リッパマンによれば、現実の環境と人間の行動の間には、頭の中に映っているイメージが介在しており、行動の多くは、これに反応して起こる。このイメージをつくる際、人間が左右される固定化した概念の枠組みがステレオタイプである。人間は日常出会う外界の事象や人々に対して、その都度一から時間をかけて認識・判断するのではなく、自分が属する社会集団や文化の中でパターン化・固定化されているステレオタイプに基づき、単純化されたモデルとしてとらえようとする。具体的には、「美しい人は善良だ」「政治家はよこしまだ」「日本人はみんな勤勉だ」のように、外見的特徴やカテゴリーの情報によって人を分類し、おのおのに一般的であることとされる特性にその人をあてはめようとする。

ステレオタイプはまた、善悪・優劣、好悪などの感情を伴うことも特徴であり、国民的・民族的ステレオタイプの例では、認知する側の国民感情によって変化する場合もある。

よまりににも広大かつ複雑で、流動的な社会状況下では、ステレオタイプの認知自体は、環境適応の一つの様式として必然的に存在している。しかし、われわれは常に社会的現実を正確に、客観的

に認知するわけではなく、また複雑な事象を単純化する過程では、多かれ少なかれ実態からのずれや歪みが生じることが避けられない。したがって、ステレオタイプは実態の正しい縮図ではありえない。また、過度の単純化と固定化によって、相手がある社会・文化に属しているという理由だけで、嫌悪・敵意等ある態度の対象とされてしまふといった本質的なカテゴリー化につながりやすい一面をもつ。

現実には同一・社会・文化の中にも社会階級・職業・地域等により、またその個人により行動や人格の相違が存在すること、対象となる社会・文化自体も変化し実態が恒常的ではないこと、異なる文化間にもつねに重なりが存在することがなどから、文化・国籍等に関するステレオタイプについては、いかなる結論に対しても慎重な態度をとる必要がある。

同時に、異文化間の対人接触場面では、認知的側面において、行動レベルで深刻な摩擦を喚起するような異文化に対する過度に単純化された考え方や、これに基づく性急な評価を留保するための方策が求められる。この際、自己の持つステレオタイプの存在を意識し、これを超えて積極的な情報を収集したり、相手文化の立場からの解釈を加味して、その文化の別の側面や経緯にも適用できる内的基準を模索することは重要と考えられる。

【編者】 Walter Lippmann, Public Opinion, Macmillan, 1930

(2) ワークシートの作成

① ワークシートと国際理解教育目標との関連

以下の表1は各ワークシートのトピック名を示したうえで、各ワークシートの主なねらいを国際理解教育目標の3本の柱 (p.116参照)と関連づけながら示したものである。◎はそのワークシートの最も主要なねらい、○は次いで重要なねらいを示す。◎や○が無い

部分に関しては、そこに該当する目標がトピックの内容と全く無関係であることを示すのではなく、柱A・B・Cのそれぞれの下位に位置付けられる3つずつのすべての中核目標は(合計9個)は、軽重があるにせよ、いずれのワークシートにも関連していると考えられる。

表1 ワークシートの主なねらいと国際理解教育目標との関連

ワークシートのトピック名		ワークシートの主なねらい								
		柱A： 豊かな社会性を持つ			柱B： 違いを認めて理解しあえる			柱C： 主体的に自分を表現できる		
		1 協力・協調の重要性	2 人権・生命の尊重	3 平和・友好の態度 及び環境への関心	1 自国理解	2 異文化理解	3 相互依存関係理解	1 思考力・判断力	2 自己表現力・行動力	3 コミュニケーション能力
1	NGOって何だろう？	◎							○	
2	海外青年協力隊員を教室に招いてみよう	◎				○	○			○
3	アフリカ人とアメリカ人		◎			○		○		
4	みんな地球市民					○		○		
5	結婚って何？	○	◎			○		○		
6	あなたの反応は？		◎					○		
7	国籍条項について考える		◎					○		
8	難民について		○	◎					○	
9	環境問題			◎				○	○	
10	日本の文化と世界の関わり				◎	○	○	○		
11	イメージはどこからやって来る？		○			◎		○		
12	アメリカの学校の校則を見てみよう					◎		○		
13	オーストラリアと日本の学校を比べてみよう				○	◎		○		○
14	姉妹都市を知る (中国瀋陽)			○	○	◎		○		
15	地球の反対側から					◎		○		
16	川崎市の姉妹都市・友好都市			○	○	◎		○		
17	世界遺産	○		○	○	◎	○	○		
18	貿易ゲーム		○				◎	○	○	
19	国際化の時代に生きて						◎	○		
20	石油 奇跡の水？悪魔の水？			○				◎		
21	今、一番大切な権利は何？		○					◎		
22	味な発見					○			◎	○
23	川崎市国際交流センターを訪ねてみよう		○	○			○		◎	
24	未来のために大切なこと			○				○		◎
25	ちがいのちがい		○					○	○	◎

②ワークシート開発の視点

ワークシートを使っての研究授業を行ったり、参考

文献をもとに研究を進める中で、以下のようなワークシート開発の視点をまとめることができた(表2)。

ワークシートを開発する際には、以下の視点からワークシートを開発する必要がある。

表2 ワークシート開発の視点

	開発の視点	理由・補足など
内容	(1) 最大公約数的な価値を教え込んだり、知識を教授して終了するような内容は避ける。生徒が自ら考えたり、体験したり、発見したり、話し合うような内容にする。	●生徒の自主的な活動なくしては、国際化時代を生き抜く「広い視野をもち、たくましく生きる子ども」(本研究の「国際性ある子ども像」)は育たない。
	(2) 賛否が分かれるような問題については、賛否両方の意見が発表できるようなものを心がける。	●教師の考えを押しつけない。生徒同士が自分の意見・考えを発言できる場を確保する。
	(3) 特定の集団(民族、国など)に対する偏見やステレオタイプがない。	●偏見やステレオタイプがある資料の場合は、そのことについて考えさせるワークシートとなる。
	(4) 多面的なものの見方が育つような内容を心がける。	●グローバルな視野を育てるためには、複眼的な見方を伸ばすことが大切。
	(5) 2つ以上の文化を取り上げる際は、独自性と共通性を認識できるような内容を心がける。	●お互いの違う点と共通点を知り、分かり合うことがこれからの時代に要求されるのではないか。
	(6) 知的理解のみでなく、共感的理解が進むような内容を心がける。	●行動力を伸ばすには共感的理解が前提となる。また、知識を与えただけでは生徒の主体性が育たない。異文化を鑑賞物として見ないことが大切。
	(7) 批判的思考が育つような内容を心がける。	●様々な情報の中から、正しい情報、適切な情報を選び出したうえで、自らの判断を下し、自己表現していく姿勢は、国際社会における習慣的な態度として望まれる資質である。
	(8) 未知なもの、意外性のある内容を心がける。	●自分の知識を見直すきっかけとなるような内容。あるいは、ふだん何気無く見たり聞いたりしているものに対して、「あれっ」と思わせるような内容。
	(9) 将来への発展性のある内容を心がける。	●一つの答えが単純に導かれ、集結するような内容ではなく、むしろ、課題・問題をあえて残し、将来への発展性が確保できるもの。
	(10) 矛盾感を与えるもの、ジレンマに突き当たるような内容を心がける。	●考える力を伸ばしたり、興味・関心を高めることができる。また、社会には、容易に解決できない問題があふれていることを示すことも意義のあることである。
設問	(1) 数を最小限にする。	●扱いの時間との関連を考える(生徒が、「書いたり」「発表する」時間との関連も考慮する)
	(2) 文章表現による回答(記入)を求める場合は、生徒が答えやすい(書きやすい)設問の内容にする。発問のポイントを明解に記述する。	●生徒の活動を活発にするため
	(3) 文章表現を求める形式のみでなく、数値の記入、アンケートへの回答、Q&Aへの回答、地図やグラフへの記入なども取り入れる。	●単調な流れを避ける。ワークシートに取り組む流れをダイナミックにし、生徒の活動を活発にする。

資料	<p>(1) 生徒が取り組みやすいレイアウトにする。 ●順番、記号を入れたりする ●文字をできるだけ大きくする</p> <p>(2) 出典等を記入しておく。新聞の場合は、新聞名、発行日。</p> <p>(3) 生徒自らが調査研究する形式のワークシートでは、提示する資料を最小限にする。ただし、初めから知識として与えることを意図する資料や生徒が入手するには複雑な手続きが必要な資料は配慮する。</p> <p>(4) 必要に応じて、教員用のみの資料も添える。</p>	<p>●生徒の理解を助ける。展開がスムーズになる。</p> <p>●著作権を守るため。 また、出典そのものが資料となる。</p> <p>●生徒自らが情報・資料を収集する方法を身につける。</p> <p>●内容をさらに深く理解したり、指導のポイントをつかむうえでの参考となる。</p>
題材	<p>(1) 生徒が興味をもっているものを取りあげる(知りたいと思っていることや不思議に思っていること)。</p> <p>(2) 身近なものを取り上げる。</p> <p>(3) 地域性のあるものを取りあげる(川崎市に関する事柄)。</p>	<p>●生徒が進んで学習しやすい。</p> <p>●生徒が具体的な問題として考えやすい。活動が活発になる。</p> <p>●自分たちの住む町の、自分たちの問題として考えることができる。</p>
その他	<p>(1) 教科との関連を配慮する。</p> <p>(2) 視聴覚教材(ビデオ・スライド等)やネットワークの活用等を念頭におく。</p>	<p>●教師用手引きに関連教科、科目などを記入する。</p> <p>●素材を提示する際に、視聴覚教材の活用がより効果的である場合は、すすんで活用したい。視聴覚教材は導入部分や展開部分などいずれにおいても活用できる。ネットワークは、情報収集や情報交換に活用できる。</p>

③ワークシートの作成手順

1つのワークシートを作成する場合、少なくとも、トピック、ねらい(国際性の資質など)、資料(素材)、活動形態の4つを総合的にデザインする必要があるが、ワークシートを作成する場合の最初の段階としては、概ね以下の4つに分けることができた。

- 1) ワークシートのトピック(内容)をまず決める
- 2) ワークシートのねらい(国際性の資質など)をまず決める
- 3) ワークシートで使う資料(素材)をまず決める
- 4) ワークシートに取り組む生徒の活動形態をまず決める

つまり、ワークシートの作成手順としては、まず、上記1)～4)のいずれかを決め、その後に残りの他の3つの要素を組み込ませるのである。

また、トピックによっては、ワークシートを作る際の一つの手順として、起・承・転・結の流れを応用することもできよう。具体的な例としては、まず、以下の枠内にあるような流れを想定し、次に、起・承・転・結のすべてにおいて、あるいはいずれかの部分におい

て生徒の主体的な活動を取り入れるのである。ただし、生徒の自主的な活動を重視するのであるから、教師が予想しない発言や展開が生れることも考えておかなければならない。また、「結」の部分では、一つの解答や徳目を教師が一方的に導き出すのではなく、そこにいたるまでの活動における生徒の様々な考え・意見を確認しあったり、今後の課題や未解決部分を確認・発見しあうなど、将来への発展性をこころがけた活動とすべきであろう。

*ワークシートのねらいが、「アメリカ人に対する私達のイメージがどこまで実像に近いかを考える」の場合

起：アメリカ人といえば、「白人」や「金髪」などを思い浮かべる。

承：それに「英語」なども思い浮かぶ。このようなこと理由の1つは、映画やテレビなどでよくそういうアメリカ人を見かけるからだろう。

転：しかし、アメリカには、アジア、アフリカ、ヨーロッパなどから来た人もたくさんいる。

英語の話せない人も多いと聞く。アメリカ人に対する私達のイメージが実像を正しくとらえているかどうか考えたり、調べたりしてみよう。

結：固定観念や先入観で相手を決めつけていることが多いようだ。しかも、その固定観念が相手の実像を正しくとらえているかどうかが明確ではないのに。

だから、いろいろな角度からのいろいろな情報を得ることによって、総合的に相手のことを考えることが必要ではないだろうか。それに、個人差もあるだろう。

(ある特定のグループの人達に対するイメージを持つ時、このような点についていつも留意する必要があるようだ)

④他の教育機関で開発された活動をもとにしたワークシートの作成

国際理解教育、開発教育、人権教育などを行うための具体的な参加型の活動が他の教育機関・団体で多く開発、紹介されている。本研究では、ワークシートの作成において、そのような他の教育機関の学習活動をいくつか応用したが(トピック18・24・25)、その際は、教師用の手引きの「留意事項・その他」で出典等を明記した。

(3)教師用の手引き

教師用の手引きは、ワークシートを使って生徒に指導する際の一つの指導の流れ等を提示したものである。各項目は以下のような意図で設定した。

- ①ねらい：ワークシートのねらいを文章表記したものと国際理解教育目標と関連させたものの両方が掲載されている。
- ②時間：ワークシートに取り組むための目安となる時間。授業者の判断で、時間の変更もありうるであろう。
- ③準備するもの：ワークシート以外に必要なものが提示されている。
- ④活動形態：以下の6つの型に分けられている。ワークシートによっては、2つ以上の形態が併記される場合もある。この6つの型は『国際理解教育の本』(参考文献参照)を参考とした。

- 1) 事象・問題発見型
- 2) 問題解決型
- 3) 調査研究型
- 4) 発表・表現型
- 5) 体験学習型
- 6) 話し合い・討論型

⑤生徒の活動：1つの展開例である。時間や状況などに応じて、提示された流れ以外の展開もありうるであろう。(ある部分を削除したり、何かを追加したり、順序を変更するなど)

⑥留意事項・その他：ワークシートを活用する際の留意事項やワークシートに関する情報などを提示した。

⑦ワークシートの記入例：予測される記入例でもある。実際には、生徒から様々な意見、疑問が出されることであろう。生徒の自由な発想を大切にしたい。その発想から、また、次の新たな疑問や話し合いが生まれることを期待したい。

⑧教科指導での活用例：提示された教科・科目や単元等は、あくまで例であるから、それ以外の教科・科目での活用もありうるであろう。

(4)発展活動

ワークシートを使っただけの活動の後に、さらに深く、あるいはより広がりをもって生徒が国際理解に取り組む場合の例を研究することも本研究の一部であると考え、ユニットの中に「発展活動」を取り入れた。発展活動を考える場合の視点として以下のような事柄が考えられる。

①活動形態

- 1) 調べる(その後、発表、スピーチ、討論、報告)
- 2) 指定した本を読む(その後、みんなで討論)
- 3) 地図への記入
- 4) ある用語の定義付けを試みる
- 5) インタビューする
- 6) 施設・協会等を訪問する
- 7) 施設に電話をかける→情報・資料を集める
- 8) 図書館に行く
- 9) ある事柄に関連する人を教室に招待する
- 10) デイバートをやる
- 11) 比較する
- 12) 劇や映画を見たり、音楽を鑑賞したりする
→その作品は何を伝えたいのか報告書を作る
- 13) 良い作品を探す(音楽、劇、映画)
- 14) 指定したビデオの、指定したセリフについて分析し、感想を述べる
- 15) クイズを作る
- 16) 統計図を見て、何が読み取れるか話し合う。
- 17) ロールプレイをする
- 18) 演劇やビデオを作り、発表会を行う。

②調べたりする際の媒体

- 1) 図書(体験記、論文など)
- 2) 新聞(記事、論説、娯楽案内など)
- 3) マスコミ全般(テレビ、ビデオ、新聞記事、広告など)
- 4) 芸術作品(建築物、映画、演劇、音楽、文学など)

③訪問したり連絡をとってみたいする施設・機関など

- 1) 平和, 国際交流などに関する施設・機関
- 2) 図書館
- 3) 市役所
- 4) 区民館
- 5) 各種の協会・団体(平和, 国際交流, 民族, N G O, ユネスコなどに関する協会・団体など)
- 6) その他 (大使館, 教会など)

(5)関連資料

基本的には, 教師用として添えられた資料であるが, 指導者の判断によって生徒に提示することもできる。

4. ワークシートの実践例

これまでに実践したワークシートの実施後の生徒の意識の変化や感想などを以下に提示した。

(1)トピック:「アメリカの学校の校則を見てみよう」

①実施クラス:川崎市立A高校 2年

②活動の内容とねらい:アメリカの学校の校則と自分の学校の校則とを具体的に比較することにより, これまでのアメリカの学校のイメージが実像とどれだけ近いかを考える。異文化理解の活動。

③実施前と実施後の生徒意識調査 (数字は%)

1) アメリカの学校の校則と日本の学校 (あなたの学校)の校則とでは, その内容に違いがかなりあると思いますか。

回 答	実施前	実施後
ア. 違いが大きい	91.2	52.8
イ. 違いはあるが少ない	2.8	41.7
ウ. わからない	5.6	2.8
エ. その他	0.0	0.0
オ. 無回答	0.0	2.8

2) アメリカの学校と日本の学校 (あなたの学校)の校則とでは, どちらが厳しいと思いますか。

回 答	実施前	実施後
ア. 日本の学校が厳しい	80.6	16.7
イ. アメリカの学校が厳しい	5.6	41.7
ウ. ほぼ同じ	5.6	22.2
エ. わからない	5.6	11.1
オ. その他	0.0	5.6
カ. 無回答	2.8	2.8

3) 実施後の意識調査

a. 以前よりもアメリカの (海外の) 学校の校則に関心を持つようになった。

回 答	%
ア. そう思う	38.9
イ. そう思わない	27.8
ウ. わからない	27.8
エ. その他	5.6
オ. 無回答	0.0

b. 以前よりもアメリカの(海外の)人達の考え方や生活の仕方に関心を持つようになった。

回 答	%
ア. そう思う	47.2
イ. そう思わない	33.3
ウ. わからない	13.9
エ. その他	5.6
オ. 無回答	0.0

c. 以前よりも日本の学校の校則に関心を持つようになった。

回 答	%
ア. そう思う	16.7
イ. そう思わない	61.1
ウ. わからない	13.9
エ. その他	8.3
オ. 無回答	0.0

d. 以前よりも日本人達の考え方に関心を持つようになった。

回 答	%
ア. そう思う	19.4
イ. そう思わない	44.4
ウ. わからない	30.6
エ. その他	5.6
オ. 無回答	0.0

④実施後の生徒の感想 (指示文「今日の活動から学んだことを書きなさい」に対して)

- アメリカは日本よりもずっと自由だと思っていたけど, その分責任もあるし, アメリカの学校でも校則が厳しいところはあるんだなと思いました。日本も制服があるくらいで, アメリカとあんまり変わらないのかなと思いました。
- 日本は身だしなみ, 見た目を重視していると思う。だけど, アメリカは人間として守らなければならないことをちゃんとやっていると。アメリカは見た目じゃなくて中身をちゃんと見てくれる気がする。
- アメリカの学校はチャラチャラしているかと思っていたら意外と厳しかった。
- 国によって考え方が違うと感じた。
- アメリカは日本よりずっと自由な国だと思ってたけど, 実際にみても校則は同じようなものだった。だけどアメリカの授業の自由な受け方や夏休みの多さを見ているとどうしても日本よりよく感じてしまう。
- アメリカの印象は“自由”という感じだったけど, すべてのことに自由なわけではないことを知りました。だけど, 少なくとも日本よりは生徒を一人の大人として認めていると思います。日本の学校では, あるときは大人で, あるときは子供とかそういうのがあると思う。

(2) トピック：「アフリカ人とアメリカ人」

①実施クラス：川崎市立A高校 2年

②活動の内容やねらい：あるグループの人達に対するイメージがどのように作られるかを、アフリカの人達やアメリカ人に対する生徒達のイメージをもとにして話し合う活動。

③実施後の生徒の感想

1) 指示文「今日の活動で気付いたことを書いてみましょう。」に対して

- アフリカ人やアメリカ人をここまで考えたことがなかったので、この機会によって自分がこれだけのイメージを（アメリカ人やアフリカ人に対して）持っているということがわかった。
- アフリカ人やアメリカ人に対しては、みんな同じようなイメージを持っていると思った。その国に行っている人々と会うとまたイメージも変わるかもしれない。
- 身近にいない人達だけに、私にとっては見た目やテレビ・資料で得たものしかないことが分かった。
- 友達の話聞いて自分と同じこともあるけれど、私と大きく違うイメージを（アメリカ人やアフリカ人に対して）持っていたりして考え方の違いがあると思った。私の思いつかないこととか、見方の違いがいろいろあっておもしろかった。
- 僕はアフリカ人が貧しいとしか思っていなかったが、他の人達は「明るい」や「笑っている」などのイメージが多かった。
- アフリカに対するイメージで、他の人から飢餓などが出てきたとき、自分がアメリカ人のほうが好きだと答えていたことがちょっと恥ずかしくなりました。たしかに、アフリカは飢餓で細い体の子供たちがいっぱいいます。子供が好きな私にとっては、いくら苦しんでいる子供でも、私が子供が好きなことは変わりません。同じ人間ならば、人種が違っていても好きといえるんだなと思いました。

2) 指示文「今日の活動で、もっと知りたいと思ったことや不思議に思ったことは何でしょうか？」に対して

- 私はアメリカ人などが演じている映画などは見たことがあるが、その国へ行ったことはない。それなのに、いつの間にか（アメリカ人に対しての）自分なりのイメージを持っているというのが不思議だった。
- アフリカやアメリカでの生活・風習を知りたい。
- アメリカ人って、アメリカ人だかなんだかわからない人が、人種がいっぱい混じっているように見える。アメリカで生まれればアメリカ人なの？

●アメリカ人でも黒人、日系人、中国人もけっこういるのに、白人のイメージが強く、アフリカ人の場合は、白人もけっこういるのに黒人のイメージがあるのが不思議に思った。

●今度は他の国の人が日本人をどんなふうに見ているのかとかをお互いに言い合ってみよう。

(3) トピック：「国籍条項について考える」

①実施クラス：川崎市立B高校 3年

②活動の内容やねらい：川崎市の地方公務員採用試験における国籍条項撤廃のビデオや外国人による日本語コンテストのビデオを見た後に、地方公務員の国籍条項の扱いや日本のプロスポーツにおける外国人選手の扱いなどについて話し合う活動。

③実施前と実施後の生徒の意識調査（数字は%）

1) 公務員採用試験における『国籍条項』という言葉を知っていますか？

回 答	実施前	実施後
ア. ある	60.6	87.9
イ. ない	39.4	12.1

2) 川崎市では昨年の公務員採用試験から一部の職種を除いて『国籍条項』を撤廃しましたが、そのことを知っていますか？

回 答	実施前	実施後
ア. 知っている	63.6	93.9
イ. 知らない	36.4	6.1

3) 『国籍条項の撤廃』という時、それがどういうことであるか分かりますか？

回 答	実施前	実施後
ア. わかる	18.2	54.5
イ. 少しわかる	48.5	27.3
ウ. わからない	33.3	15.2

4) 外国人の横綱は、現在の法律・制度のもと、外国人のまま親方になれると思いますか？

回 答	実施前	実施後
ア. 思う	39.4	9.1
イ. 思わない	27.3	84.8
ウ. わからない	53.3	6.1

5) あなたは、外国人が日本で働くことに興味・関心がありますか？

回 答	実施前	実施後
ア. ある	24.2	33.3
イ. 少しある	24.2	27.3
ウ. ない	51.5	39.4

6) あなたは、自分の国籍が何であるか知っていますか？

回 答	実施前	実施後
ア. 知っている	100.0	100.0
イ. 知らない	0.0	0.0

④実施後の生徒の感想文（指示文「この学習を通して理解したことや感じたことなどを書いてみよう」に対して）

- 外国人が国などの仕事をするのにたいして完全に不安がなくなるわけではないが、種族や文化が違って同じ人間なので、それぞれの意見を取り入れていくのは大事だと思う。だから、僕は国籍条項の撤廃に対して、今は反論しない。
- これからは外国人が多くなり、日本人も世界へどんどん進出していくので、もっとオープンに文化を変えていったほうがいいと思う。
- ある面では国籍条項を取り入れ、そしてある面では撤廃という形を取って欲しいです。
- 外国人が日本で働くにはとても大変だということが分かった。
- 外国人への差別はやめて、他国を認める国にしたい。
- 日本という国は自分の国のことしか考えなくて、伝統等にこだわり過ぎて回りのことが見えなくなっていると思う。だから、プロ野球とかでも外人枠というものがあると思う。外国人は自分の実力を日本で活かしたいと思って来日してくるのだから、日本人と対等の立場に立たせてあげたほうがいいと思う。
- 外国人は大変な思いをして日本で暮らしているのに、めげることなく生活しているのは凄いなと思った。

(4)トピック：「世界遺産」について考えよう」

- ①実施クラス：川崎市立C高校 2年
- ②活動の内容やねらい：万葉集にある遣唐使派遣の和歌を学習する中で、日本の世界遺産と海外文化の影響について考えさせ、さらに、その保存についても関心を持たせる活動。

③実施前と実施後の生徒意識調査（数字は%）

1) 「世界遺産」という言葉を聞いたことがありますか？

回 答	実施前	実施後
ア. ある	72.7	100.0
イ. ない	27.2	0.0

2) 世界遺産に興味がありますか（知りたい、行ってみたいなど）

回 答	実施前	実施後
ア. ある	77.2	81.0
イ. ない	22.7	19.0

3) 国連で登録されている世界遺産にどんなものがあるか知っていますか？

回 答	実施前	実施後
ア. 知っている	36.4	71.0
イ. 知らない	63.6	29.0

4) 3)で「知っている」と答えた人は具体的に書いてください。

〔実施前〕

日本の世界遺産	海外の世界遺産
●法隆寺 ●東大寺 ●五重塔 ●金閣寺	●ピラミッド ●万里の長城 ●アンコールワット ●スフィンクス ●ポンペイ ●エアーズロック ●コロシウム

〔実施後に追加されたもの〕

日本の世界遺産	海外の世界遺産
●銀閣寺 ●薬師寺 ●春日大社 ●原爆ドーム ●清水寺 ●姫路城 ●興福寺	●自由の女神 ●ベルサイユ宮殿 ●ピサの斜塔 ●モアイ像 ●グランドキャニオン ●ナスカの地上絵 ●ガラパゴス諸島

5) 自分の国の世界遺産の内容やその歴史・背景などを知ることは、自分の国について知ることにつながると思いますか。

回 答	実施前	実施後
ア. そう思う	63.6	81.0
イ. そう思わない	0.0	0.0
ウ. わからない	36.3	19.0

6) 法隆寺地域の仏教建築物は、海外の文化の影響を受けていると思いますか。

回 答	実施前	実施後
ア. そう思う	31.8	81.0
イ. そう思わない	27.2	5.0
ウ. わからない	40.9	14.0

④実施後の生徒の感想（指示文「本日の授業についての感想を書こう」に対して）

- 日本を含め、世界中にたくさんの世界遺産があることを知った。それらを見ると、昔の文化のすごさがよくわかった。もう二度と過去には戻れないので、大切にしていかなければならないと思いました。
- 遣唐使とかが、他の国の文化を持って帰って、日本とかがそれによって影響を受け、今いろいろなものが残っているんだと思うと、すごく不思議な気がする。
- 今まで、全くといっていいほど興味がなかった。授業でやってみて、日本の世界遺産は何なのかと知りました。思っていたより世界遺産があっけびっくりした。
- 「世界遺産」という言葉は知っていたが、その内容はほとんど知らなかった。日本にも世界遺産がたくさんあるとは思わなかった。京都や奈良に行

って、いろいろな寺とかを見たことがあるけど、その時はほとんど興味がなくて見過ごしていた。でも、今回の授業でやって、今度はじっくり見に行きたいと思った。日本だけでなく、外国のものもできる限り見てみたい。

●世界遺産がこんなにあるとは思わなかったので、びっくりした。私は、日本にある文化遺産もすべて知っているわけでもなく、行ったことももちろんない。これを機会に日本の文化遺産巡りでも計画して、行ってみようかなと思った。

●「世界遺産」というのは、どうすれば「世界遺産」になるのかと思った。でも、日本がこんなにも世界遺産を持っているとは気付きもしなかった。最後に質問したいんですけど、現在造った建物が、もし何百年も、何千年もたったら、その建物は「世界遺産」と呼ばれるものになるのですか。

●前の時は何をやっているのかさっぱり分からなかったけれど、今日の話聞いてわかってきた。漢文とか英語とかの前のセクションで韓国と日本の関係について勉強したけど、文化で見れば凄さを感じる。確かに私達ももっと意識をもってそのでかい遺産を守らなきゃいけないんだと思った。

●「世界遺産」は歴史のあるものだから、大切にこれからも残して欲しいし、自分が生まれていない時代のことに興味があるので、世界遺産を見て、知らない時代について触れてみたいです。

(5) トピック：「未来のために大切なこと」

①実施クラス：川崎市立A高校 2年

②活動の内容とねらい：省エネルギーの解決策の優先順位を、各自で、次いで各グループで考え、決定してゆく活動。グループで話し合う際に自分の意見を明確に述べ、相手を説得しようと努力する中で、コミュニケーション能力の向上をめざす。

③実施後の生徒の感想文

1) 話し合いで大変だったこと（指示文「意見が対立した時どうしましたか？」に対して）

●みんな意見がばらばらだった。みんながいいと思ったカードを見直してどれがいいか考えた。意見を聞いて、理解して納得していった。

●意見を言うのが大変だった。自分は納得派。

●もう一度カードを読み直して、そして考えてみて、相手の考えに納得できた。

●自分の意見をうまく言えなかった。

●周りの人の順位を見て、何となく納得できた。でも、かなり自分の意見を妥協していると思う。

●他の人の意見と自分の意見をあわせて考えた。

●Aさんとの意見の対立が楽しかった。

●お互い意見を言い合って、納得して決めることができた。

●話し合いをしたが、Bさんに説得されてしまった。

●頑張ったが、意見が通らなかった。

●意見がみんな食い違っているから、自分の意見をしっかりと言った。

2) 実施後の生徒の感想（指示文「今日の活動を終えて考えたことを書いてみよう」に対して）

●一人一人が真剣にこういう問題を考えていかなければいけないんだなあと思った。

●自分で1番だと思ったものが、他の人にとっては、3番や4番だったりして驚いた。今はどんなふうに省エネとかリサイクルとかをしているのか分からないので、もっとよく知りたいと思いました。地域に呼びかけたほうがいいと思いました。

●学校の中でもリサイクル運動を行ったほうがいいのかと思う。リサイクルデーなどを作ってみる。

●話し合いはかなり楽しかった。またやりたいです。

●環境に対する周りの人の意見が聞いてよかった。これから地球のためにできることを少しずつでもやっていきたいと思う。（他にも色々知りたいと思った）

●環境問題を世界的に今見直し始めているが、もっとしっかりやらないと、後で自分達が後悔すると思う。僕は、環境問題に積極的に取り組みたい。

●日本人は恥ずかしがりやだと思った。僕も日本人なのでうまく話せなかった。自己主張のできるアメリカ人は良いと思った。

●私だけの意見じゃなく、みんなの意見が聞いて良かった。

●机を動かすのは面倒くさかったけど、たまにはこんな活動があると面白いと思った。

●100年後、絶対僕は生きていないと思うから、環境なんて僕には関係ないと思っていた。

●集団生活では、どこかでだれかの妥協が必要。

●身近なことからと言っても完璧に守られているわけではないから、国や市や県で少しずつ対策を立てていったほうがいいのかと思った。一人一人の考え方、取り組み方が一番だと思う。

●水道や電気を使いすぎているんだなと思いました。

(6) 考察

トピック「アメリカの学校の校則を見よう」では、アメリカの学校にたいして新しい情報を得ることによって、生徒はこれまでのイメージを具体的に変わることができた。これは、自分たちの持っている情報が偏っていたり、異文化の理解を短絡的な思い込みで終わらせてしまうことがままあることへの気付きともなった。また、同時に、アメリカの（海外の）人達の考え方や生活の仕

方に、より関心を持たせることができたといえよう。

トピック「アフリカ人とアメリカ人」では、生徒がアメリカ人やアフリカの人達に対して持っている自分のイメージがどれだけ実像に近いものであるかを疑い始め、その実像を知るために、それらの国々の生活・風習をもっと知りたいと思ったり、また、その国に行けば認識が変わるかもしれないと思い始めている。これは、イメージが個人個人の異なる体験・情報によって勝手に作られることが多いということに気付いた結果である。さらには「何をもって「～人」というのか」「世界の人々が日本人（人）をどう思っているのか知りたい」など国際理解の基礎的な問いかけが生まれている。

トピック「国籍条項について考える」では、公務員採用試験での国籍条項の存在や川崎市での地方公務員採用試験の国籍条項撤廃の報道に気付き、その内容に関心を持つようになったと言えよう。また、国内の様々なスポーツ界での国籍の扱いの違いにも気付き、それらを比較することによって、日本での国籍の扱いについての関心が高まったといえる。

トピック「[世界遺産]について考えよう」では、世界遺産の存在そのものへの気付きだけでなく、その内容への関心が高まった。特に日本の世界遺産の存在・内容への興味・驚きが顕著であり、日本の世界遺産と海外の文化の影響との関連にも関心が及び、自国文化理解や相互依存関係理解につながる活動となった。また、生徒の関心・気付きは世界遺産の保存までにも及んでいる。

トピック「未来のために大切なこと」では、グループの話し合いにおいて、自分の意見を明確に述べることの難しさを痛感した感想が多い。また、その話し合いによって、他生徒のいろいろな意見を聞いたことへの評価も高い。環境問題については、関心が高まり、具体的な方策を述べる生徒もいる。

以上の事柄を総括的に見た場合、ワークシート実施後の生徒たちの反応は、知識が増えただけでなく、思考がより積極的になったり、多様なものの考え方に気付くようになったり、新しい問題への気付きが生まれたりしており、ワークシートを使っただけの活動がそのねらいに応じた成果を生んだといえよう。

5. 資料集の作成

国際理解教育に関する資料集として以下の内容で検討、資料収集、編集を行った。

(1)川崎市に関連するもの

- ①川崎市の姉妹都市・友好都市・友好港
- ②友好を進めている市立の学校とその姉妹校
- ③国際理解に関連する市内の公的施設
- ④小学校・中学校、川崎市総合教育センターでの国際理解教育へのこれまでの取り組み

- ⑤国際交流に関連する川崎市内のNGO
- ⑥川崎市に定住する外国人の状況
- ⑦川崎市立の高校での国際理解教育の実践例

(2)図書・教材・メディアに関連するもの

- ①国際理解に関連する図書
- ②視聴覚教材の紹介～ビデオを中心に～
- ③施設・機関・団体などの連絡先

(3)国際理解に関連する調査集計結果

- ①国際理解に関する予備調査（生徒対象）
- ②国際理解・交流に関する意識調査集計結果（生徒対象）
- ③国際理解教育に関する教員の意識調査

以上、川崎市という地域性を意識した資料作りと教師がよりどころとなる資料の提供を主な柱として資料収集や編集を続けた。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

この研究での成果は、大きく分けて以下の6つであると考えられる。

(1)資質・能力を伸ばすワークシートの開発

これを各学校で活用することによって資質・能力を伸ばす国際理解教育が推進されるほか、各学校で新しいワークシートを開発する際には、本研究で開発したワークシートを参考とすることができるであろう。

(2)開発したワークシートの実践による成果(生徒の姿容)

国際理解教育を具体的な形で実践できたことに加え、開発したワークシートの活用によって、生徒が他者に対して共感的に理解する姿勢を持ったり、国際化時代に必要な資質・能力を伸ばすことができたことを確認できたことは大きな成果であった。

(3)ワークシート開発の視点や手順の明示

研究授業や文献研究を続けた結果、ワークシート開発のための視点や手順を明示することができた。これは、他の学校で、国際性を伸ばすための独自のワークシートを開発したり、国際理解教育をさらに推進していくうえで参考になるであろう。

(4)発展活動の提示

発展活動において、具体的な活動内容、活動形態を数多く提示できたことも大きな成果であると考えられる。具体的な活動内容はハンドブックに記載されており、活動形態・内容の視点は本研究紀要に記載されている。これらは地域との連携を意識したものとなっており、また、将来の「総合的な学習の時間」(仮称)の展開を研究する際にも参考となるであろう。

(5) 資料集の作成

ハンドブックに収録する資料集は、“川崎市”を意識したものであり、地域との連携や小学校・中学校・高校の流れなどを念頭においたものである。各学校で、あるいは、川崎市全体で国際理解教育が論じられる際の基礎的な資料の一つとなるであろう。

(6) 『国際理解教育ハンドブック』の完成と配布

平成9年度内に、研究の成果をハンドブックにまとめ、印刷・製本した(A4判, 200ページ)。その後、国際理解教育がより広く推進されることを願って、川崎市立のすべての高校、中学校に配布した。このことは、本研究の最大の成果の一つとってよいであろう。

2. 今後の課題

上記のような成果はあったものの、今後の課題も多い。例えば、『国際理解教育ハンドブック』については、より多くの学校での活用を推進することであり、その過程において、各学校で国際理解教育のための時間を確保したり、ワークシートや資料集の完成度を高めたり、さらに新しいワークシートを開発することなどがあげられる。新しいワークシートの開発に関しては、それが継続的になされ、さらに市内において共有化されていくなれば、大きな財産となるであろう。また、学校内外の人的援助の活用を進め、各種施設・機関との連携をより深める中で、発展活動に積極的に取り組んでいくこと、さらには、教科やホームルームの指導計画の中でのワークシートや発展活動の位置付けを研究することなども大きな課題となるであろう。さらに課題を国際理解教育全般に間口を広げれば、国際理解教育の概念、目標、実践領域などの見直しのほか、留学生の派遣・受け入れ、学校をあげての国際交流、生徒会を中心とした学校行事や教科指導の中での国際理解教育のほか、2002年からの実施が予定されている「総合的な学習の時間」(仮称)のカリキュラム編成と関連させた中での国際理解教育の扱いなど取り組むべき課題は多い。

おわりに

この研究は、平成7年6月に高校教育研究会議の準備研究として立ち上げられた。その後、平成8年4月より本研究として設定され、結果として、実質的には概ね3年間の研究であった。その間、この研究を進めるにあたり、東京学芸大学の佐藤郡衛先生をはじめとして、多くの先生方にご指導・ご協力をいただき、心より感謝の意を表したいと思います。また、国際理解教育に関する意識調査においては、川崎市立川崎総合科学高等学校長の花形元文先生をはじめ、川崎市立の5つの高校の多くの先生方にご協力・ご助言いただき、誠に有難うございました。

・参考文献

- 日本ユネスコ国内委員会『国際理解教育の手引き』
東京法令出版 1989年
- 永井滋郎『地球的な協力のために—国際理解教育』
第一学習社 1989年
- Judy Moore, Christine Roughead, *WE ARE MANY PEOPLE*
Commonwealth of Australia 1989年
- Margaret Pagone, Luigi Rizzo, *Multicultural Resource Book*
INT press 1990年
- 米田伸次, ほか『国際理解教育展開事例集』
一橋出版 1990年
- サイモン・フィッシャー『WORLD STUDIES 学び方・教え方ハンドブック』 めこん 1991年
- 西村俊一(編)『国際教育事典』 アルク 1991年
- 原田種雄・赤堀侃司(編)『国際理解教育のキーワード』
有斐閣 1992年
- 大津和子『国際理解教育—地球市民を育てる授業と構想』
国土社 1992年
- 多田孝志・本多成人『国際理解教育Q&A』
教育出版センター 1993年
- 石坂和夫, ほか『国際理解教育辞典』創友社 1993年
- ジェームズ・A・バンクス 平沢安政(訳)『多文化教育』
サイマル出版会 1994年
- ユニセフ『開発のための教育—ユニセフによる地球学習の手引き』 日本ユニセフ 1994年
- 小林哲也『国際化と教育』放送大学教育振興会 1995年
- 溝上泰, 片上宗二, 北俊夫『環境と国際理解の教材開発と指導のアイデア』 明治図書 1995年
- 開発教育推進セミナー『新しい開発教育のすすめ方—地球市民を育てる現場から』 古今書院 1995年
- 魚住忠久『グローバル教育—地球人・地球市民を育てる—』 黎明書房 1995年
- 高橋豊, ほか『国際理解教育の本』
川崎市総合教育センター 1995年
- 田中治彦『南北問題と開発教育』 亜紀書房 1996年
- 清水厚実『国際理解教育における教材の問題—授業の実践記録の分析を通して—』
(財)図書教材研究センター 1996年
- 林英和, ほか『国際理解教育の本 その2』
川崎市総合教育センター 1997年
- 国際理解教育センター『参加型で伝える12のものの見方・考え方』 国際理解教育センター 1997年
- 金澤孝, 渡辺弘『ユニセフによる地球学習の手引き—新しい視点に立った国際理解教育』 教育出版社 1997年

・指導助言者

東京学芸大学教授(当センター専門員) 佐藤 郡 衛